

かぐらおか

(題字は初代学長 山田守英氏)

第 82 号

平成 7 年 3 月 24 日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



第17期生を送るにあたって……学 長… 2	クリスマスコンサート…………… 8
第17期生を送るにあたって……飯塚 一… 3	学生団体の設立・継続届について…………… 8
旭川医科大学第17回卒業生名簿…………… 4	平成6年度1年のあゆみ…………… 9
卒業にあたって……………生田 克哉… 4	平成7年度前期分授業料免除及び延納・ 分納について……………11
卒業にあたって……………清水 恵子… 5	平成7年度日本育英会奨学生の募集について…11
卒業にあたって……………本田 光則… 5	学生教育研究災害傷害保険の加入について…11
SAYONARA ……エサヌール・ホーク… 6	スキー教室……………12
退官の日を迎えて……………内田 倅喜… 7	教官の異動……………12
新歓合宿のお知らせ…………… 8	窓 外……………立野 裕幸…12
20才以上の学生の国民年金への加入について… 8	



第17期生を送るにあたって

学長 清水 哲也

皆さん、学士学士学位記取得おめでとう。

一般教育、基礎医学、臨床医学教育を統合した6年一貫教育を受けられ、今、学位記を手にした皆さん、そして他の学部より2年間も長い学生生活を終えるまで、やさしい、いつくしみの眼差しで見守ってこられたご父兄の皆様のお気持ちに思いを馳せるにつけ、私自身、萬感、胸に迫るものがあります。

この想いこそは、全力を尽くして今日まで教育に当られた全教官にまさに共通した感慨でもあります。

また、卒業式という言葉は、どちらかといえば、事の終わりといった語感がありますが、これから皆さんが立ち向かって行く、医学の道の厳しき、険しさを思いますと、今日という日は、まさに事の始まりでもあります。

それは医師ほど「生涯」にわたる学習、いわゆる「生涯学習」が、強く求められている職業は他にないからであります。

医療や医学の研究は、その対象となるものが、人命でありますから、当然といえば当然でありましょう。

人生とは、「重荷」を背負って歩くが如しという言葉がありますが、この「生涯学習」のコンセプトを忘れてしまった医師は、病める人達やその家族からの信頼を一瞬にして失うことになります。

この先、皆さんの多くは臨床の第一線にあって、診療に携わることになるでありましょうが、「医療の原点」を片時も忘れてはなりません。

「医の原点」、「医のこころ」とは、人の「いたみ」をわが「いたみ」ととらえることに他なりません。

病に苦しむ方々の、「悩める心」を、「苦しむ身体」を皆さんの豊かな感性と暖かい手のひらの「ぬくもり」で、しっかりと受けとめることであります。

個々の症状や疾患に目を奪われて仕舞う、診療技術中心の浅薄な職業人ではなく、患者さんの全体像を「そこはかかない」思いで、やさしく包みこんであげることのできる「全人的医療」をめざす医師になってほしいのです。

「医療」は「包括医療」という言葉によって表現されるように、ただ単に診断し、治療を行うといったコンセプトから、予防医学、社会的リハビリテーションまでも含めた概念、つまり保健、医療、社会

福祉の「在り方」までもも総合的にその視程の中にとらえる考え方が強く求められるに至っております。

したがって、かかる社会的動向に対応するためには、看護要員などのコメディカルスタッフはもとより、包括医療にたずさわる全ての構成員から全幅の信頼が寄せられるチームリーダーの資質もまた強く求められるています。

ただ単に病院の中だけで、手術をしたり、処方をするといった従来型の医療から、老人保健施設、老人訪問看護ステーション、在宅介護支援センターに至るすべての施設の機能にかかわりをもってきます。

これに対処するためには、激変する社会事象に対しての、常に鋭い洞察力と行動力が要求されます。

激変する社会事象と申しましたが、阪神大震災もまた、私ども医療にたずさわる関係者に多くのことを教えてくれました。

停電、断水、といった「ライフライン」が瞬時にして断たれる非常事態に我々は、どう対処すべきかであります。

X線装置はもちろん、全ての画像診断装置はもとより、心電計さえ使えぬ状況のなかで、唯一の診断手段は、問診と触診と聴打診のみであったという事実であります。

先端医療ということに、とかく目を奪われがちであった私どもにとって、医療の、そして医学のファンダメンタルズとは、何かをあらためて示唆してくれた、まさに「頂門の一針」であったと申しても過言ではないでしょう。

30年後の2025年には国民の4人に1人が65歳以上の高齢人口で占められ、その頃には寝たきり老人の数も230万人に達し、虚弱老人といわれる介護を要する老人に至っては500万人に達するであろうと推定されております。

病める人達、老いた人達に、心身相関の観点に立った、そこはかかない「思いやり」、人の「いたみ」をわが「いたみ」ととらえることのできる「心やさしい」医師こそが、今、社会から求められている「医師像」であることを強調して、本日の学士学位記授与式に当たっての皆さんへの「はなむけ」の言葉といたします。



第17期生を送るにあたって

第17期生担当 飯塚 一

17期生のみなさん、御卒業おめでとうございます。この時期は国家試験も終わり、ほっとしていることでしょう。卒業にあたり、学年担当として、みなさんに何かはなむけの言葉を贈らなくてはいけないのですが、なかなか思いつきません。私の先輩の言葉を贈ろうと思います。

武田勝男先生という方がいます。病理学総論、各論の先々代の編著者と言った方がみなさんたちには分かりやすいかもしれません。かなり以前に亡くなられた方で、北海道大学の病理の教授を長くしていました。私自身も習ったことはありませんが、北大病理を一流の、それも特異なサムライ集団に仕立てあげた方です。敵も多かったそうですが、弟子たちには大変慕われました。私の最も尊敬する故板倉教授はおそらく最後の頃の弟子ではないかと思えます。(片桐教授もそうではないかしらん?)

その武田先生が研究者とはどういうものかという問いに対して言われたという言葉が伝説として残っています。

研究者は、冷静な眼と平静な心で客観的観察を行なうものだという言い方があります。おそらく、これが一般的な言い方のはずです。ところが、武田先生は、そうではない、と言うのです。研究者というものは、熱く血走った眼と、いらだちの心を持ち、とことん主観的な観察をするものだというのです。

(武田先生は、これをドイツ語で言われたそうなのですが、何しろ伝説なので原文は伝わっていません。)

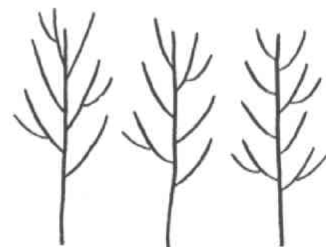
昔、この話を聞いた時は、そんなものかなと、首をひねったものでしたが、今になってみると武田先生の言われた言葉の意味が何となくわかるような気がします。

研究は大変に個性的な作業です。基礎でも臨床でも何か新しい概念を作り出す人間の心理は、おそらく武田先生の言われたとおりです。逆に言うと、そういう人間でないと新しい物が見えてこないというところがあります。むしろまわりの人間の方が、冷静かつ平静な眼で見えています。血走った眼と、いらだちの心で、主観的な観察をして得た概念を、どれ

だけの説得力をもって、まわりの冷静な第三者に示すことができるか、彼らをまきこみ熱狂させることができるか、というところが本当の意味での勝負です。この部分は100%客観性と論理性が要求されます。

大学を卒業して20年もたってみると、物を創っていく人間が、自分自身を含め、いかに少ないかが良くわかります。たとえば、臨床において、どんな小さな事でも新しい見方なり概念なりを創り出す者は残念ながら稀です。あなたたちの中から1人でも2人でもそういう人間が出てくれたらと思っています。大学というところは最終的にはそういう人材を必要としていますし、あなたたちの母校である旭川医科大学も例外ではありません。皆さんたちの健闘を心から祈ります。

最後に、誤解がないように言っておきますが、ものを創らない人間がだめだと言っているわけでは決してありません。そのような人達にも良い医師になるという、これはこれで大変に重要な、またある意味では最も困難な道が残されています。良い医師とは何かということについては、みなさんたちはこの6年のあいだに十分、学んだはずですが、「医者は増えたが、良医はむしろ減っているのです。」という先達の言葉もついでに贈っておきましょう。



卒業にあたって

第17期卒業生 生田 克哉



毎年この季節になると入試のために初めて旭川に来た日のことを思い出します。私は北海道で生まれ育ったのですが、それまで一度も旭川を訪れたことが

ありませんでした。この時は、旭川という地はとても寒くて雪が多くて、しかも大学の周辺は殺風景に見え、もし合格できてもこの地でやっていけるのだろうか、と不安に思ったことを覚えています。しかし、それから6年間の大学生活を旭川で過ごした今では、もうこの旭川を、そしてこの大学を離れたくないと思うほど好きになってしまいました。

6年間という長い大学生活の中には思い出に残っている事は数えきれないほどあります。

なかでも、学祭実行委員会の一員として何年間か学祭に携わってきた事はよい思い出です。特に4年生の時に、大規模なコンサートを企画し成功を収めることができたことは、よい経験だったと思います。

臨床実習も大きな思い出となりました。直接患者

さんに接しての勉強は、今までの机上の勉強とは全く異なっており、とまどいながらの一年間でした。実習では、医学的知識よりも、個々の患者さんへの接し方というものが非常に重要で難しいものだという事を多く教えられた気がします。また、実習は一年間同じ三人グループだったのですが、時にはドジを踏みながらも常に仲良く助け合う充実したグループであったと自負しています。

私は部活というものをほとんどしていなかったので、自由な時間が比較的多く、自分のやりたいことをいろいろとできたと思います。これから先は医師となり仕事や勉強に忙しい日々を過ごすので、このように自由な時間を自由に過ごせた日々というものも私にとっては大きな財産になったと思います。

最後になりましたが、この6年間に私を様々な面において指導・助言して下さった全ての先生方・先輩方、そして友人達に心から感謝したいと思います。このようにして受けた御恩は、これから旭川医科大学の名に恥じないような立派な医師となるよう努力することで、少しずつかもしれませんが必ず返していこうと思います。

卒業にあたって

第17期卒業生 清水 恵子



このたび、卒業を迎えるにあたりまして、お世話になりました諸先生方、諸先輩方、職員の方々、同期の皆さん、後輩の皆さん、そして家族に、心から感謝の意を表したいと思います。『本当に有難うございました。』そして『これからも、どうぞよろしく願いいたします。』

この6年間を振り返ってみますと、大学ではもちろんのこと、家庭、社会の中で、実に沢山の方々に支えられ、成長させていただきました。その中で、特に印象に残りました、ボランティア活動の思い出について、記させていただきます。

大学2年生から参加させていただきました「いのちの電話」は、めまぐるしく変る社会の中で、さまざまな不安や悩みをうちあけられずに、独りぼっちで悩んでいる人に対して、電話を通して一緒に話し合い、解決の方向を見いだそうとする、悩める人の

よき隣人となることが願いの市民運動で、自殺防止を主たる目的とした、ボランティアによる電話相談（無報酬）です。“ひとりぼっちで悩まずに、いつでも誰でもどこからでも”と24時間眠らぬダイヤルを続けています。いささかでも他人のお役に立てたならと思ひ相談員としての研修を受け、電話を取り、一生懸命掛け手の事を理解しようと頑張った結果実感したことは、「人の手助けなどは痴がましい…それどころか逆に私がどれほど豊かにされ、励まされ、成長させていただいたことか…」ということでした。掛け手から伝わってくる真剣な生への息づかい、相談員仲間での語らい、専門職のアドバイス、心が模索した読書等、全てを通して与えられた経験は、私にとりまして、言葉では言いつくせない大切な宝物となりました。

これから先、医師として患者さん方に関してゆく時、多くの患者さんによって、経験し学び、励まされ、成長し豊かにさせていただくのだな…と思っています。

卒業にあたって

第17期卒業生 本田 光則



カンボジア内戦のテレビ映像を見て、医師になることを志してから10数年、当大学に入学してから、早6年がたちました。

入学当初に心にいだいた期待や不安も今はなつかしく思います。

自分が医学生としてはっきり自覚したのは、5年の冬の臨床実習からでした。臨床実習が始まる前は、講義や本で勉強したことで、病気についてある程度理解しているつもりになっていましたが、実際に始まってみると、患者さんへの問診や診察が不十分で、病気についてあまりわかっていないことに気づきました。また、診断や治療には、病気についての理解だけでなく、患者さんのもつ心理的社会的背景をも理解する必要があることを思い知らされました。患者さんは最良の教科書であるといいますが、まさに

その通りで、患者さんからは講義や本で学べることに以外に実に多くのことを学ばせていただき、とても感謝しています。

6年間の大学生活を振り返ってみても、十分満足すべきものは何一つ残せませんでした。様々な人々との出会いや出来事は自分にとって大きな収穫だったと思います。6年間の大学生活において、反省すべき点は多々ありますが、チャレンジ精神が不十分であったことが一番の反省点であり、これからの人生における課題であると思います。

卒業後は医師や研究者として巣立っていくわけですが、存学6年間で得られた経験をもとに、今後待ち構えているであろう困難を乗り越え、患者さんから感謝されるような医師になるべく、日々努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、私を長い間支援してくれた家族、友人、先生方、職員の方々に感謝したいと思います。



SAYONARA

A.N. Ehsanul Hoque

I have been given a chance to study in this Medical College by Professor Yasushi Abiko. I came to Asahikawa on January 21, 1990 and already 5 years have passed. During the last 5 years I learnt many things and in my life many big changes happened, such as I got married with Nina and we got a daughter. We named our daughter "ASAHI" according to Asahikawa. Professor Abiko also gave a chance to my wife, Nina to study in the department of Pharmacology. I mainly did experiment with working heart system and Nina measured intracellular Ca^{2+} in the isolated myocytes. In our experiments, we have got some very interesting results. We are excited and interested especially in the changes of myocardial lipid metabolism, and now we are heavily involved with the metabolic action of lysophospholipids (lysophosphatidylcholine) on the heart and protection of the myocardium from lysophospholipid-induced metabolic changes. Last year I had a chance to present some of my work in the XIIth International Congress of Pharmacology, Montreal, and XVI Annual Meeting of International Society for Heart Research, London, Ontario, Canada. At that time I visited Vancouver, Toronto, London, Niagara Falls, Montreal and many other places in Canada. It was a wonderful trip, I just wish Nina could have come with me. Last year we also visited many places such as Sapporo, Otaru, Niigata, Akita, Aomori, Hakodate, Monbetsu, Rumoi, Hamamatsu, Kyoto, Osaka etc. In next March we are going to Nagoya City to attend a another annual meeting of the Japanese Pharmacological Society.

I have got a Post doctoral position in the UWO, Canada. I am currently preparing for my departure for Canada and, although I am extremely busy, I feel that everything is progressing well; I am certainly looking forward to beginning my new work in Canada.

We are leaving Asahikawa on March 25, 1995. We will go to Alabama, USA to attend the ISHR (International Society for Heart Research) meeting (May 21-25, 1995), where I am going to present some of my recent work. After the ISHR meeting we will go to Canada at the end of May and I will start my new work in the beginning of June, 1995. We will be very sorry to leave Asahikawa as we have made many friends here and have had the opportunity to do the kind of work we have enjoyed. So before that time we are trying to meet friends and to see some beautiful places of this wonderful land, as much as we can. The view of the mountain 'Asahidake' (covered with white snow) is really wonderful. The mountain 'Asahidake' was like a friend to me. We really enjoyed our lives in Asahikawa. Specially in Winter we enjoyed Skiing. We will always miss the natural beauty of Asahikawa and the kind, friendly people of Asahikawa. The people of my department and the other people of this Medical College, helped me a lot. I will never forget their kindness- thank you very much.

I again want to give my special thanks to Professor Yasushi Abiko and Professor Hiroko Hashizume, who helped us very much to make our lives and study easier in Asahikawa.

We are looking forward to seeing you all again. With all our best wishes. Sayonara.



退官の日を迎えて

化学教授 内田 倅 喜

21年6ヶ月を経て、いよいよ退官の日を迎えました。その間、教官、事務官の皆様、多くの卒業生及び学生諸君に、大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。かえりみて私はこの大学において比較的言いたいことを言って過ごして来たように思います。このことはある人に「あなたは特別だ」と保証されたので確かなことでしょう。一方、私が言いたいことを言ったとすると、言われた人々も当然いた訳で、その人々にとっては必ずしも愉快なことではなかった筈であります。またまたこの場を借り深くお詫びを申し上げる次第です。

この21年は私にとって大変重い年月でした。最も心に残るのは、開学の頃北大教養部の時間割りの焼き直しで始まった教育をやはり本学独自のカリキュラムで行おうということで、当時の言葉で言えば新カリ作りに参加お手伝いをさせていただいたことです。今では勿論それも旧カリとなりましたが、当時は批判もあり、抵抗もありました。年月も経って来るとかえって批判した人々の口から手直しに対し擁護論が出るようになりました。作成に当たった人間には始めから欠陥も承知し、手直しの必要も承知していたので大変驚いたこともあります。当時実行可能なカリキュラムという旗印を掲げて多くの教官、学生と討論を行ったことも懐かしく思い出されます。そこで1つ気付いたことは若い人が必ずしも改革を望まないということであり、自分の受けた古い教育、又他大学で行われている教育に固執する傾向にあることでした。

カリキュラムの細かい内容は履修要項、臨床実習カリキュラムに書かれていますが、一方これは学生に対する教官側の約束であるという考え方もしていました。勿論、カリキュラム委員会はその枠組みを決めただけで要項等の内容についてはその教育を実際に行う各教授におまかせした次第です。従って内容的に詳しく書かれている科目、目次的な表現の科目、何も書かれていない科目等一様ではありません。それぞれの教官の考え方をみる思いがします。この旧カリも平成2年から、土曜閉庁をも見越し、現行カリキュラムに変わりました。しかし課程の枠組みは殆ど同じであり、似たような内容の履修要項、臨

床実習カリキュラムが作成されています。名称も所々変わってはいますが、その底を流れるものは変わらず、世の中の流れに物理的に対応したようにも見られます。

履修要項とえば本学にとってそれは始めから存在するものと認識され、教育を行うのに不可欠のものとして理解され、20年間作成し続けて来た訳です。カリキュラムの手直しも常時行われて来たのが事実です。ところが近頃、東京辺りからカリキュラム改革、シラバスの作成と言う声が聞こえて来るようになりました。時に他大学のそれを見てこれが実行可能であろうかと疑問を持つこともあります。「我々は始めからそれらをやってるよ」と申し上げるのは当然ですが、一方狐につままれたような気にもなります。

以上のようなことは、自らを厳しく評価することを目的とした年報の発刊も第1号は昭和60～62年収載となっており、平成6年に第4号の発刊をみた本学にとって「継続こそ力なり」とでも言う以外にありません。

21年6ヶ月の終わり頃には附属図書館の仕事をさせていただきました。と言っても実務のすべては図書課の皆様がやって下さった訳です。改めて皆様に御礼を申し上げます。ここしばらくの間に図書館というものへの考え方も大きく変わったように思えます。外国雑誌の値上り、円高ドル安、随意契約、見積もり合わせ、競争原理の導入、高価な二次資料の購入停止、情報化時代、図書業務すべての電算処理、学内 LAN の導入等々の言葉に直面して来ました。こういった時代の流れの中で正確な医科大学図書館の未来像を描くことが出来るかどうか自信はありません。しかし、先にあげた幾つかの言葉も変化への原因と結果がからみあっているように思われます。

とりとめのないことを書いて来ましたが、もっと色々なことがあったようにも思えるし、又さしたることはなかったようにも思えます。21年6ヶ月の自己の重い思いの中を彷徨っている感じがします。唐突ですが、本学の限りない発展を祈り、皆様の御健康を祈って筆をおきます。

新歓合宿のお知らせ

毎年大好評の「新入生歓迎合宿」を、今年も4月8・9日に行うことになりました。

予定されている内容は次のとおりです。まず学内においては、医療についての講演、各クラブの紹介、学内めぐりなどがあります。その後は、高砂温泉に移動し、そこではグループごとの先輩方との交流会、新入生の自己紹介を含めたゲーム（昨年は、一発芸をした人、歌を歌った人など、いろいろいました。）、恐るべきクラブ勧誘などが行われ、その後は1年生だけの時間となります。新しい友と飲み明かすのも良いですし、温泉ですから、もちろんお風呂に入るのも良いでしょう。眠くなった方のための布団も用意してあります。また、少しアルコール濃度が高くなっても、先輩方がすぐに助けてくれるので安心です。

昨年は94名の1年生が参加し、約200名の先輩方が合宿を盛り上げてくださいました。この合宿の有意義さは体験してみなければ分かりません。きっと、大学生活6年を通じての心の友との出会いが待っていることでしょう。多くの友達を作って、大学での新しい生活を素晴らしいものにしてください。

～上級生共々、心より新入生の参加をお待ちしております。新入生歓迎実行委員会より～

20才以上の学生の国民年金への加入について

国民年金法の改正に伴い、大学に在学する学生で20才以上の者は、平成3年4月1日から国民年金の被保険者（当然加入）として適用を受けることになりました。

従来学生については、20才以後在学中に障害者となった場合、国民年金に加入していない限り障害基礎年金が支給されず無年金となっていました。また、基礎年金制度は、原則として、20才から60才までの40年間加入することを前提に満額の老齢基礎年金を支給することとされていますが、学生は、任意加入とされていたため20才以上の在学期間中に、国民年金に加入していなかったものについては、卒業後年金制度に加入しても満額の老齢基礎年金が受けられませんでした。

このため、国民年金法が改正され、平成3年4月1日から、20才以上の学生も全て国民年金に当然加入することになりました。

なお、国民年金への加入の手続き、保険料の納付方法及び保険料の免除等の詳細については、住民票を登録している市区町村の国民年金担当窓口へ直接問い合わせください。

クリスマスコンサート

室内合奏団と合唱部によるクリスマスコンサートが12月20日(火)・23日(金)それぞれ病院ロビーで行われました。

このコンサートは日頃の練習成果を発表するとともに「入院生活を送っている患者さんの励みになれば」とこの時期毎年企画されているもので、ロビーには入院患者、看護婦、医師など約100名が詰めかけ、コンサートを楽しみました。

(学生課)



学生団体の設立・継続届について

平成7年度において、新しく設立しようとする学生団体、もしくは活動を継続しようとする団体は、4月28日(金)までに設立届または継続届を学生係に提出してください。

なお、継続届の提出がない学生団体は、解散したものとして処理しますので注意してください。

(学生課)

平成6年度

1年のあゆみ

4月

- 8日 平成6年度入学式 (於 体育館)
〔新入生102名 (うち女子学生21名)〕
- 18日 新入生研修
- 19日 (於 第2~4セミナー室、和室)



新入生研修

- 22日 医師国家試験合格者発表
(本学合格者 120名、合格率 91.60%)

6月

- 3日 第20回医大祭
- 5日 テーマ:『リストラの彷徨』
- 30日 学位記授与式 (於 第2会議室)
(学位記被授与者 14名)



第20回医大祭

7月

- 9日 第41回北海道地区大学体育大会
(当番校 室蘭工業大学)
〔本学参加種目〕陸上競技(男)、準硬式野球、バスケットボール(男女)、バレーボール(男女)、サッカー、卓球(男女)、剣道(男)、弓道(男女)、ハンドボール

- 成績:準硬式野球 3位
男子総合16位、女子総合19位
- 7月 第37回東日本医科学生総合体育大会夏季大会
- 8月 (主管校 北海道大学)
〔本学参加種目〕陸上競技(男)、準硬式野球、テニス(男女)、ソフトテニス(男女)、卓球(男女)、バレーボール(男女)、バドミントン(男女)、サッカー、バスケットボール(男女)、柔道、剣道、弓道、空手、水泳(男女)、ゴルフ(男女)、馬術、ハンドボール
- 成績:ソフトテニス(女子複)優勝
バドミントン(男) 3位
バドミントン(女) 準優勝
バドミントン(女子複) 2位
ゴルフ(女子単) 優勝
剣道(女子単) 優勝
水泳(女 500m 平泳ぎ) 3位
陸上(ハンマー投げ) 2位

8月

- 3日 平成6年度納骨式 (於 本学納骨堂)
- 8月 第37回東日本医科学生総合体育大会冬季大会
- 3月 (主管校 東京大学)
〔本学参加種目〕ラグビー、スキー、アイスホッケー

9月

- 7日 体育大会 (主催 学生)
〔競技種目〕バレーボール、ソフトボール、綱引き、駅伝、卓球、バドミントン
- 21日 平成6年度解剖体慰霊式並びに文部大臣感謝状伝達式 (於 体育館・第4セミナー室)



体育大会

30日 学位記授与式 (於 第2会議室)
(学位記被授与者 7名)



解剖体慰霊式

10 月

3日 平成6年度公開講座
28日 「成人病としての心臓・血管病」



公開講座

11 月

5日 本学記念日

12 月



クリスマスコンサート

19日 スキー教室 (於 北大雪スキー場)
20日 講師4名 厚生補導委員会委員、
参加学生24名
22日 学位記授与式 (於 第2会議室)
(学位記被授与者 5名)



スキー教室

1 月

14日 平成7年度大学入学者選抜大学入試センター
15日 試験(本学会場 813名)

2 月

15日 内田教授最終講義
17日 平成7年度大学院入学者選抜試験
25日 平成7年度第2次試験(前期日程)

3 月

6日 平成7年度第2次試験(前期日程)合格者発表
8日 内田教授、歡送式
10日 平成7年度大学院入学者選抜試験合格者発表
12日 平成7年度第2次試験(後期日程)
22日 平成7年度第2次試験(後期日程)合格者発表
24日 平成6年度学士学位記授与式(於 体育館)
(学士学位記被授与者 98名)
博士学位記授与式(於 第2会議室)
(博士学位記被授与者 22名)



内田教授、最終講義

平成7年度 前期分授業料免除 及び延納・分納について

平成7年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する者で、下記基準のいずれかに該当すると思われる者は、教務部学生課厚生係で必要書類を受け取り下記の期間内に申請すること。

なお、申請者については、選考の間授業料の納入を猶予します。

また、不明な点は、同係に問い合わせ願います。

記

1. 授業料免除基準

- (1) 経済的理由によって授業料の納付が困難であり、かつ、学業優秀であると認められる場合
 なお、平成7年度において原級に留置されている者又は、最短修業年限を越えて在学している者は、免除の対象としない（休学の理由による者を除く。）
- (2) 授業料納期前6月以内（新生については、入学前1年以内）において学生の学資を主として負担している者（以下「学資負担者」という。）が死亡し、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けたことにより、授業料の納付が著しく困難であると認められる場合
- (3) (2)に準ずる場合であって、学長が相当と認める事由がある場合

2. 申請書類

- (1) 授業料免除申請書
- (2) 学資負担者が死亡した場合は死亡診断書(写)
- (3) 災害を受けた場合は罹災証明書（市区町村、警察、消防署が発行したもの。）
- (4) 市区町村発行の所得証明書（給与所得者については、平成6年分の源泉徴収票を、給与所得者以外については、平成6年分の確定申告書（一面・二面）等の写し（生計を一にする家族全員分）を、また、学資負担者が死亡した場合は、死亡前の所得証明書を併せて添付すること。）
- (5) 失業者は、民生委員又は職業安定所の証明書
- (6) 生命保険金の支払いを受けた場合は、当該保険会社の保険金支払証明書
- (7) 家族の中に就学者がいる場合は、その者（申請者本人及び義務教育の就学者は除く。）の在学証明書
- (8) 自動車保有に関する申立書
- (9) その他家庭事情により参考となる証明書等

3. 申請期間

- (1) 在学生……………平成7年2月20日（月）
 ～3月31日（金）
- (2) 平成7年度入学生…平成7年4月7日（金）
 ～4月21日（金）

平成7年度 日本育英会奨学生の 募集について

日本育英会は、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しております。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生の募集要項を、4月上旬に公用掲示板に掲示しますので、貸与を希望する者は、提出期限に遅れないよう所定の書類を教務部学生課厚生係に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、同係に相談してください。

学生教育研究災害傷害保険の 加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中における災害事故補償のために『学生教育研究災害傷害保険』の賛助会員大学となり下記のとおり加入受付事務等を行っています。

本保険は、学生の互助共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備え、できるだけ全員の加入を勧めています。

まだ加入していない学生は、加入するようにしてください。

記

1. 受付期間 自平成7年4月3日(月)
至平成7年4月28日(金)
2. 受付窓口 教務部学生課厚生係
3. 保険料
 6年間 3,400円
 5年間 2,950円
 4年間 2,450円
 3年間 1,900円
 2年間 1,300円
 1年間 750円
4. 支払い保険金の種類と金額

種類	区分	正課中 学校行事中	学校施設内の休憩中 学校施設内外の課外活動中（学校施設外の課外活動については、大学に届出た活動に限る。）
死亡保険金		1,200万円	600万円
後遺障害保険金		54万円～1,800万円	27万円～900万円
医療保険金		実治療日数4日以上が対象 6千円～30万円	実治療日数14日以上が対象 3万円～30万円
入院加算金		1日につき4,000円	1日につき4,000円

スキー教室

今年度も12月19日(月)・20日(火)の両日、恒例のスキー教室が、外国人留学生9名を含む24名の学生の参加を得て、北大雪スキー場で実施されました。

初日は、午後から初級・中級・上級の3班に分かれ講習、夜には講師及び外国人留学生を囲んで懇親会が開かれました。

2日目は午後2時にスキー場を発つまで講習が行われ、全員名残惜しくもスキー場を後にしました。
(学生課)

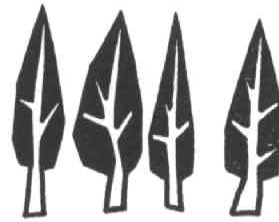


教官の異動

※採用 6.12.16 内科学第三 教授 高後 裕

※辞職 7. 1.15 小 児 科 講 師 岡 敏明

※昇任 7. 2. 1 小 児 科 講 師 東 寛



窓 外



立 野 裕 幸

「国際交流の必要条件」

昨年暮れ、インド南部のケララ州トリバンデラムで開かれた研究会議に出席する機会があった。ケララ州には High Background Radiation Area といわれ、大地からの放射線量が通常の地域よりも数十倍も高い所がある。土壤中に含まれるトリウムが原因だそう。会議では地域住民の発ガン率や先天異常発生率について話し合われた。その内容が新聞に載ったために、急遽、州知事に会見する一幕もあった。

滞在中、インド側からいろいろと持て成しを受けた。そこは北緯10度の熱帯地方で、どこにでもヤシの実が降ってきそうな位たくさん成っており、何度もご馳走になった。インドの水は飲料水に適しておらず、天然水であるヤシの実ジュースが安全なのである。小さな穴にストローを差して丸ごと渡されるのであるが、温めたスポーツ飲料という感じで、初

めての者にとってはなかなか飲み干せない。飲んだ後、さらに、鉈で真二つに割ってくれるので、中の実の部分へラで削って食べる。これが礼儀なのである。これまた珍味。ヤシの実には緑色と黄色のものが、黄色の方が高級なのだそうだが、私には味の違いはわからなかった。食事香辛料をたっぷり効かせたスパイシーなものや酸酵させて酸味のあるものが多く、食べ尽くすのに困るものもあった。

小型バスでインド最南端のコモリン岬に夕日を見に連れていってもらったが、片道約4時間、道路は舗装されているとはいえ凸凹で、しかも車のサスペンションは硬く、振動がじかに体に伝わってくる。おまけに外の熱気でクーラーはあっても無きに等しい状態。途中、小さな町を通るが、信号はなく、どけどけといわんばかりにクラクションを鳴らしながら、牛や人、車を縫うがごとく、無謀ともいえる追越しをしていく。何度「ウォー」という声をあげたものか。ヒヤヒヤものであった。インドでは夕日を見ると幸せになれるということで、大勢の人がバスや車で海岸へやってくる。8日間の短い滞在中であったが、手に汗握り、3度も夕日見物に行った。

国際交流には好き嫌いのない丈夫な胃、健全な体、そしてケガを恐れぬ勇気も必要であることを痛感した。
(生物学 助教授)